

令和6年度

日高管内社会教育職員研究協議会

研修関係事業報告書

日高管内教育委員会連絡協議会

北海道教育庁日高教育局

日高管内社会教育職員研究協議会

目 次

日高管内社会教育職員研修会	2 ~ 5
中部ブロック研修会	6 ~ 9
東部ブロック研修会	10 ~ 13
西部ブロック研修会	14 ~ 15
社会教育指導部会（ひだか未来塾）	16 ~ 20
社会体育指導部会	21 ~ 23
図書館部会	24 ~ 25
学芸員部会	26 ~ 28
日高管内社会教育主事会事業実施報告	29 ~ 30

令和6年度 日高管内社会教育職員研究協議会総会及び研修会 開催要項

- 1 日時 令和6年5月15日（水）午後1時30分～
- 2 場所 浦河町総合文化会館 ふれあいホール
- 3 参集 管内社会教育関係職員、国立日高青少年自然の家職員、日高教育局職員
- 4 内容

(1) 開会式・オリエンテーション

(2) 研修会

テーマ：「地域課題を考えるツール focus」

講師：北海道浦河高等学校

キャリアガイダンス部長 佐藤 友洋 氏

(3) 情報提供 日高教育局社会教育指導班、国立日高青少年自然の家

(4) 部会別協議 ・課長部会（円卓会議室）

・社会教育指導部会（第3研修室）

・社会体育指導部会（和室）

・図書館部会（第2研修室）

・学芸員部会（美術工芸室）

終了後 主事会総会
(第3研修室)

(5) 総会

5 日程 13:15 13:30 13:40 13:45 14:45 15:00 15:10 16:00 16:20 16:30

受付	オリエンテーション 開会式・	準備	全体研修会	情報提供	休憩・移動	(主事会総会含) 部会別協議	協議会総会	解散
----	-------------------	----	-------	------	-------	-------------------	-------	----

6 出席者 5月8日（水）までに出席者名簿を事務局へ報告願います。

7 報告先 浦河町教育委員会 社会教育課社会教育係 係長 小田 卓朗
〒057-0013 浦河町大通3丁目5番地 総合文化会館内
メールアドレス：shakaikyoiiku@town.urakawa.hokkaido.jp
TEL0146-22-5000 FAX 0146-22-0100

令和6年度日高管内社会教育職員研究協議会総会及び全体研修会 報告書

1. 日 時 令和6年5月15日（水） 13:30～16:30

2. 会 場 浦河町総合文化会館

3. 参加者 47名

4. 開催内容

(1) 開会式

主催者あいさつ

浦河町教育委員会 社会教育課 課長 小林 正樹

(2) オリエンテーション

事務局より連絡事項

(3) 全体研修会

研修テーマ：「地域課題を考えるツール focus」

講師：北海道浦河高等学校 キャリアガイダンス部長 佐藤 友洋 氏

- ・浦河高等学校生が考案したすごろく型の地域課題を考えるツール focus について地域住民が地域課題を考えるうえで共通したツールがないことから発案し、幅広い年齢層や様々な立場の人でも楽しく参加できるような工夫をしているツールであることがわかった。
- ・各町1名程度になるようグループに分かれてルール説明後、focus の体験を行った。テーマに対する意見発言では住んでいる地域や年齢、役職等によって様々な視点からの意見があり、お互いに各町のことや違う視点からの意見によって地域課題を考える気づきがあった。また、地域課題という話し合うには身構えてしまったり固い印象を受けたりする内容も、すごろくというゲーム性を取り入れたことでどの年代も楽しくゲームに入り込み、自分の意見を限られた時間で相手に伝えるよう考えたり、他者の意見を評価し尊重できるような雰囲気づくりがなされたりしている印象であった。

(4) 情報提供

- ①日高教育局教育支援課社会教育班 主査 齋藤 佳太 氏
- ・令和6年度日高管内教育推進の重点について
 - ・北海道家庭教育サポート企業制度について
 - ・社会教育主事講習（A日程）について
- ②国立日高青少年自然の家 企画指導専門職 渡辺 裕太 氏
企画指導専門職 橘 絢子 氏
- ・子どもゆめ基金について

(5) 各部会協議 部会別（部会長、年間活動予定等について協議）

- ・課長部会
- ・社会教育指導部会
- ・社会体育指導部会
- ・図書館部会
- ・学芸員部会

※各部会終了後、日高管内社会教育主事会総会を開催。

(6) 令和6年度 日高管内社会教育職員研究協議会総会

①報告事項 【承認】

- ・報告第1号 令和5年度 事業経過報告
- ・報告第2号 令和5年度 収支決算報告
- ・報告第3号 会計監査報告

②議案 【承認】

- ・議案第1号 令和6年度 事業計画（案）
- ・議案第2号 令和6年度 収支予算（案）
- ・議案第3号 役員改選

(7) 閉会式

- ①講評：日高教育局教育支援課社会教育班 主査 齋藤 佳太 氏
- ②次期事務局挨拶：新ひだか町教育委員会生涯学習課 課長 山口 理絵 氏

<研修会の様子>



令和6年度 日高管内社会教育職員研究協議会 中部ブロック研修会 開催要項

- 1 趣 旨 生涯学習を推進するうえでの諸条件整備や学習機会及び関連事業の充実を図るため、中部ブロック二町の社会教育関係職員が一堂に会し、研修の場を共有することによって相互の連携を深め、将来を展望した学習の情報や知識を習得するとともに、社会教育行政の果たすべき役割について研究協議する。
- 2 テ ー マ 「多文化共生の魅力や課題について考える」
※近年、増加傾向にある移住外国人との理解や調和を図るための課題やコミュニケーション方法等を学ぶ。
- 3 主 催 日高管内社会教育職員研究協議会
- 4 主 管 新冠町教育委員会
- 5 期 日 令和6年7月2日（火）午後1時30分～午後3時30分
- 6 会 場 新冠町レ・コード館 第1研修室
(新冠町字中央町1-4 TEL 0146-45-7833)
- 7 参加対象 日高管内中部ブロック（新ひだか町・新冠町）社会教育関係職員
- 8 研修内容
(1) 講座 外国人とのコミュニケーションのための「やさしい日本語」
講師 一般社団法人 北海道日本語センター 代表理事 二通 信子 氏
(2) 情報提供 日高教育局 教育支援課 社会教育指導班 主査 斎藤 佳太 氏

9 日 程

13:15 13:30 13:40 15:10 15:20 15:30 15:35

受付	開会式	研修会	休憩	情報提供	閉会式	解散
----	-----	-----	----	------	-----	----

令和6年度 日高管内社会教育職員研究協議会 中部ブロック研修会 報告書

1 今回の研修に至った経緯

近年、少子高齢化による労働力不足もあり、建設業や農業、観光業など各分野において外国人労働者の受け入れが積極的に行なわれている。

日高管内においても総人口が減少するなか、技能実習などを目的とした外国人人口が増加傾向にあり、近所のスーパーやコンビニなどでも、外国人が連れ立って買い物をする姿をよく見かけられるようになった。

私たちの生活は、こうした外国からの働き手によって支えられており、今後も地域社会の担い手として期待される外国人住民との調和を図るためには、今どのようなことを知り、行動しておくべきなのか、多文化共生の推進について理解を深め、課題や手がかりを学習するきっかけになればと考えた。

2 研修の目的

総務省『地域における多文化共生推進プラン』による多文化共生の定義とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定めている。

しかし、地域住民は外国人人口が増加しているのを実感しながらも、同じ地域で暮らす外国人との顔の見える付き合いはなかなか進んでいない現状である。

その背景には、外国人受け入れに関わる様々な諸問題もあるが、言葉の問題もその一つであることから、一般社団法人北海道日本語センターから講師を招聘し、外国人とのコミュニケーションのための「やさしい日本語」をテーマとした研修会を開催した。

3 研修の内容

講話：外国人とのコミュニケーションのための「やさしい日本語」

講師：一般社団法人 北海道日本語センター 代表理事 二通 信子 氏

(1) 北海道、新冠町、新ひだか町の外国人の状況 在留外国人統計2023年6月

	外国人 総数	技能	特定技能	技能実習	家族滞在	永住者、 特別永住者	その他
新冠町	234	129	12	51	25	6	11
新ひだか町	295	154	24	30	25	42	20

2024年5月末時点データ

北海道	57,406人 (人口の1.1%)
新冠町	289人 (人口の5.7%)
新ひだか町	318人 (人口の1.6%)

(2) 地域における外国人との関わりに対する意識調査 (約1,000人にオンライン調査)

- ・外国人住民の増加の実感や影響 「ある」3人に1人
- ・外国人住民と日常生活での関わり 「ある」5人に1人
(飲食店、宿泊施設、コンビニ、英会話など)

(3) 職場での日本語の問題 (外国人雇用企業76社への調査回答)

外国人従業員が日本人従業員と意思疎通がうまくできない原因

1. 外国人従業員の日本語能力不足 (64%)
2. 日本人従業員がわかりやすく話そうとしないため (32%)
3. 日本人従業員の方言などが理解しにくい (13%)

事例) A建設会社

社内で「やさしい日本語」講座を行ない、実習生の受入前に全員で対応を相談。

⇒建設機械などの写真を撮ってカードを作り、覚えやすいようにする。

⇒必要な用語はそのまま覚えてもらうが、指示は「やさしい日本語」で。

(4) 「やさしい日本語」が必要なところ

- ・災害時及び防災に関する情報提供
- ・役所や病院などでの手続き、役所や学校などからのお知らせ
- ・地域、職場、学校などでのコミュニケーション
- ・商店、飲食店、宿泊施設、交通機関などでの対応
- ・地域のボランティアによる日本語教室

(5) 多文化共生社会と「やさしい日本語」

まずは声をかけることから。うまく伝わらない時は言葉や話し方を変えてみる。

「やさしい日本語」とは日本語に慣れていない人にも配慮した簡単でわかりやすい日本語。

例) 「ここは駐車禁止です」⇒「ここは、車をとめることができません」

外国人の日本語レベルも色々であり、相手の状況を見て話し方を調整する。

コミュニケーションはお互いの協働作業である。

日本に慣れていない外国人との会話は、日本人側の様々な配慮や助けが必要である。

(6) 「普通の記事」と「やさしい日本語の記事」の比較

A 普通の記事

海や河口の近くで強い揺れを感じたときは、直ちに海岸や河口から離れ、高台や避難ビルなど高い場所に避難すること。



B 「やさしい日本語」の記事

海で大きな地震があったとき、すぐ海や川から遠くに離れて、高い場所に行きます。

講師から提示された例文を「やさしい日本語」に変換するグループワークが行なわれた。

普段、使っている日本語をわかりやすい言葉に言い換えて伝えることは、外国人だけではなく、子どもや高齢者、障がいのある方など様々な方にとってわかりやすいコミュニケーション手段の一つとなることを学習した。



(7)「やさしい日本語」のまとめ

- ・はっきり話し、相手の言葉をゆっくり待ち、相手の話をよく聴くこと。
- ・会話中、言葉が途切れるのを嫌い、急いで次の話題に入るのではなく、相手の返答を待つ。
- ・楽しく安心して話せる雰囲気を作る。
- ・難しい言葉を使わず、簡単なわかりやすい言葉を使い、短い文で、様々な手がかりを使って熱心に伝える。項目を並べるときは箇条書きに。
- ・見ただけで内容が伝わるようなイラスト、写真、記号などを使用。
- ・漢字を適度に使い、漢字にはルビをふる。小学校低学年程度の漢字はそのまま使う。



4 情報提供

日高教育局 教育支援課 社会教育指導班 主査 斎藤 佳太 氏

北海道教育推進計画で定める施策の一つである「子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進のためのグローバル人材の育成」として、多文化共生社会の実現に向けて、全ての学校において国際理解教育を充実させるとともに、異文化交流や多様な価値観に触れる機会を創出するなど、生徒が道内大学の留学生や地域の外国人等と交流する取組みを促進する説明があった。

また、札幌市の取り組みとして、札幌国際プラザによる「さっぽろ外国人相談窓口」のほか、区役所や学校などにボランティア通訳を行かせたり、日本語を教える教室を開いている事例等について情報提供があった。

令和6年度日高管内社会教育職員東部ブロック研修会 開催要項

1 趣旨

日高東部三町の社会教育関係職員が連携を深め、社会教育事務・事業の向上に資する知識や技術の習得を図り、教育行政職員としての意識と能力を高めるための研修機会とする

2 研修テーマ

持続可能な社会の実現に向け、地域の可能性を引き出す学びをつくる社会教育のあり方

3 ブロックテーマ

共生社会の実現に向け、地域における持続的な学びの場の充実を考える

4 主催

日高管内社会教育職員研究協議会

5 主管

浦河町教育委員会

6 後援

北海道教育庁日高教育局

7 日時

令和7年2月14日（金） 14:00開会 ※受付13時40分～

8 会場

浦河町総合文化会館3階ふれあいホール（TEL 0146-22-5000）

9 参加対象

日高管内東部3町（浦河町・様似町・えりも町）社会教育関係職員

10 研修内容

(1) 開会式

開催町挨拶 開催町挨拶 浦河町教育委員会 教育長 和田 修 様

(2) 軽スポーツ体験「モルック」

座学 講師 浦河町教育委員会社会教育課長 小林 正樹

体験 講師 浦河町教育委員会社会教育課 スポーツ振興室

(3) 情報提供「障がいのあるなしに関わらず参加できる学びの場の充実について」

講師 北海道教育庁日高教育局社会教育指導班 主査 斎藤 佳太 氏

(4) 情報交換交流

(5) 閉会式

講評 浦河町教育委員会社会教育課長 小林 正樹

11 研修日程

13:40 14:00 4:15 14:45 15:45 16:00 16:30 16:50 17:00

受付	開会式 説明	座学	軽スポーツ体験 モルック	休憩	情報 提供	情報交換 交流	閉会式
----	-----------	----	-----------------	----	----------	------------	-----

12 その他

実習では体を動かしますので、それに適した服装でお越しください。着替えをお持ちになられた方には更衣室をご用意しますので、そちらをご利用ください。

令和6年度日高管内社会教育職員研究協議会東部ブロック研修会 実施報告

1 日 時 令和7年2月14日（金）14：00～17：00

2 会 場 浦河町総合文化会館 3階ふれあいホール

3 参加者 19名

4 実施に至った経緯

持続可能な社会の実現に向け社会教育行政が担うのは、地域で学びの場を充実させることである。SDGsの根幹となる「誰も取り残さない」という理念は、誰もが学ぶことのできる学習環境を整備する面で社会教育にも求められる重要なものであり、本研修のテーマとして妥当と考えた。

現状として、障がい者の学習機会は充実していないが、今後は多様な参加者に学びの場を提供していくことが重要となる。こうした転換期を迎えるにあたり、これからの社会教育のあり方について考え、情報交換を行う機会として本研修を企画した。

5 本研修の目的

北海道社会教育主事会協議会は令和5年5月に研究テーマ「持続可能な社会の実現に向け、地域の可能性を引き出す学びをつくる社会教育のあり方」を発表した。期間は北海道の教育計画とリンクさせ2028年（令和10年）3月までの5年を定め、これを受け各管内主事会は地域の実情に応じたサブテーマを決め、今年度で研究協議を進めてから2年目となる。

本研修会ではテーマを「共生社会の実現に向け、地域における持続的な学びの場の充実を考える」とし、子どもから高齢者、障がい者など様々な方が同じフィールドで行うことができる軽スポーツ「モルック」についての研修会を開催した。

6 研修の内容

(1) 軽スポーツ体験「モルック」座学

講師 浦河町教育委員会社会教育課長 小林 正樹 氏

「どこでも誰でも楽しめるスポーツはどれくらいあるのか、どれでもいいのか」という問題提起から、モルックの基本的な情報や魅力、町内の軽スポーツ実施状況、函館でのモルック世界大会の視察についてお話から、モルックがいかに気軽に体を動かせるスポーツかを解説していただいた。

まず、モルックのルールと道具の名称、スポーツとしての起源について説明し、浦河町で行われているゲートボールやユニカールなどの軽スポーツに見られる、「競技人口の減少」や「扱う道具が重く、子どもや老人が気軽に遊べない」といった問題点から、モルックの「道具が軽くコンパクトに持ち運べて、放ることができれば誰でもできる点」、「ルールは単純だが、戦略の奥深さがある点」等の利点と、浦河町の施設や学校での実践内容を紹介していた。

また、函館での世界大会視察の際に、モルックの競技会場が土であることや公式大会でも幅広い年代の参加者がおり家族チームでの参加もあるとのこと。現地の方と運営等について

のお話を聞くことができ、モルックは芸能人の参加もありメディアも多数で注目のスポーツであり、「公式大会でもセルフでジャッジを行って揉め事もなく、年齢や性別、障がいの有無を超えてチームを組めるスポーツ」と述べ、自由で多くの人にチャンスがあるスポーツとしてモルックを紹介していただいた。



(2) 軽スポーツ体験「モルック」体験

講師 浦河町教育委員会社会教育課 スポーツ振興室

はじめに、講師によるルール説明を行った。

<ルール>

- ①交互にモルックを投げ、先に50点丁度になったチームの勝利
- ②複数本倒れれば倒れた本数が点数となり、1本だけなら書いてある数字が点数となる。
- ③3回連続でスキttlに当てることが出来なければその時点で負け。
- ④50点を越えた場合は25点まで戻して再開

1チーム3名の計6チームに分かれて実際にゲームを行った。2コートに分かれて総当たり戦を行い、最後は各ブースの同順位同士が戦い、全体の順位を決めた。優勝は女性3名のチームであった。

なかなか狙ったスキttlにモルックを当てるのが難しく、3回連続当てることが出来ずに敗北してしまうチームを多かった。それとは対照的に、難しい場所にある1本を狙い打ちできていることもあり、大いに盛り上がった。

参加者からは「狙ったものに当てるのが結構難しいが、仲間や相手チームともコミュニケーションを取りながら行うことができ、初対面でも仲良くなれるものでとても良いと思う。」といった感想があった。



(3) 情報提供「障がいのあるなしに関わらず参加できる学びの場の充実について」

講師 北海道教育庁日高教育局社会教育指導班 主査 斎藤 佳太 氏

斎藤氏より障がい者の生涯学習が今後の課題として掲げられる背景や、今後に向けた基礎的環境整備や合理的配慮について説明を受けた。

実例として、日高管内身体障がい者スポーツ大会での道具の工夫といった配慮の事例や、各教育局で既存の事業を福祉関係者の協力で改善した例が紹介された。全体を通して、新たな取り組みを始めることは労力がかかるため、関係機関が一体となり既存の事業をアレンジするなど簡単にできることから進めていくことが望ましいといったお話をいただいた。

(4) 情報交換交流

協議シートを用いて3グループでの情報交換を行い、モルックを体験した感想や本研修を通して気づいた点を振り返り共有し、以下のような感想があった。

- ・初めてモルックを体験したが、ルールの理解も早く何度か行いうちに駆け引きまで考えられ初めての人同士でも仲良くなれると感じた。
- ・屋内外でスペースを選ばずにできることや手軽に誰でも負担が少ない形で行える点から、町のスポーツ離れを改善することに役立つのではないかと感じた。
- ・人との距離が縮まるのが早く、非常に盛り上がる点から、アイスブレイクにも適していて、学校統合の際に他校の児童生徒と交流する手段としてもよいのではないかと感じた。
- ・力がいらず大人と子どもなど異世代での真剣勝負もでき、負けてももう一回やりたくなる魅力あるスポーツ。



7 最後に

本研修会では、普段は社会教育事業を企画・運営する職員が、参加者の立場となってモルックを体験し、スポーツやモルックの経験があるなしに関係なく、初めて会う人とも手軽に楽しみながら交流し距離を縮められることを身をもって感じる機会となった。

本研修会のテーマである「障がい者に対する生涯学習の推進と共生社会への理解」について、昨年度研修会の「障がい者スポーツは障がい者のためだけのものではなく、健常者も積極的に参加する」ことへのひとつの手段として、様々な方が一緒に行えるモルックからヒントを学び、今後も各町で障がい者に対する生涯学習の推進と共生社会への理解と実践を重ねていきたい。

本研修会にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和6年度 日高町・平取町キッズ交流事業

「チャレンジ アトラクション」開催要項

1. 趣 旨 地域の特性や環境を活かした体験活動を通じて日高町と平取町の児童の交流を図る。
また、他町の児童との共同活動を通し自分の役割や協調性、リーダーシップ等の育成を図り、互いに学び合う関係を築くことを目的とする。
2. 主 催 平取町教育委員会、日高町教育委員会
3. 共 催 日高管内社会教育職員研究協議会
4. 日 時 令和7年1月19日（日）9：50～14：00（予定）
5. 会 場 CHILD HOOD（伊達市旧大滝中学校校舎）
※平取町中央公民館又は紫雲古津生活館に集合・解散となります。
集合時間 平取町中央公民館7：10 紫雲古津生活館 7：20
解散時間 平取町中央公民館16：40 紫雲古津生活館 16：30
6. 対 象 小学4年生～6年生
7. 定 員 日高町10名・平取町10名 … 計20名
※応募多数の場合は抽選となります。（遅くとも1月14日までに結果を郵送します）
8. 内 容 【次世代型アトラクションパークを活用した参加者同士の交流】
・グループごとに各アトラクションのブースを体験します。
9. 日 程 9：50 10：00 10：30 13：00 13：50 14：00 14：10
- | | | | | | |
|--------|------------------|-----------|----|-----|--------|
| 到
着 | 開会式
オリエンテーション | アトラクション体験 | 昼食 | 閉会式 | 出
発 |
|--------|------------------|-----------|----|-----|--------|
10. 携 行 品 お弁当（昼食）、水筒等飲み物（ペットボトル可）、タオル（汗拭き）、参加料
その他各自で必要とするもの（汗をかいた時用の着替え・酔い止め 等）
11. 参 加 費 **500円**（保険料ほか）※当日おつりのないよう持参してください。
12. 申 込 込 目 **令和7年1月6日（月）まで**
・表面のQRコードから必要事項を入力し申し込み
・電話で申込先に申し込み
※上記いずれかの方法で申し込みをお願いします。
必要事項：学校名、学年、参加者氏名、性別、足のサイズ（アトラクション専用靴下
購入のため）、保護者氏名、住所、連絡先
13. 申 込 先 平取町教育委員会 生涯学習課 社会教育係（担当：窪田）電話：01457-2-2619
14. そ の 他
・悪天候時に一部内容が変更になる場合があります。
・当日体調が悪い場合は参加を控えてください。
・事業の様子を撮影し、広報等に掲載させていただく場合がございますので
了承願います。（個人情報保護法に基づく掲載）

【平取町・日高町キッズ交流事業】～チャレンジアトラクション～

1月19日（日）に平取町と日高町の小学4～6年生の交流を目的とした平取町・日高町キッズ交流事業を開催しました。今回は伊達市旧大滝中学校校舎を改装して誕生した道内初の次世代型アトラクションパーク「伊達大滝 CHILDHOOD」を会場に両町合わせて24名の児童が参加し、グループごとでの活動を通して交流を深めました。

会場内は少しひんやりしていましたが、真冬の寒さをものともせず汗だくになりながら普段経験することができない SASUKE を彷彿させる数々の大型アトラクションやレーザータグと呼ばれるレーザー銃を使用した「痛くない鬼ごっこ」を体験し、短い時間の中でもたくさんの会話がうまれ、充実した時間となりました。

このような経験を重ねて、人と関わることの楽しさを感じてもらいつつ、集団行動の規律を守る意識を持って、これからも様々なことに挑戦して行ってほしいです。

【開会式】



【ロール&スイングゾーン】

【エアバックジャンプ】



【Wipeout】



【フィアーブリッジ】



【レーザータグ】



令和6年度 日高管内青少年体験活動推進事業「ひだか未来塾」 開催要項

1. 目的 中学生・高校生が他町の参加者との交流や、地域課題の解決に向けた協議等とおして、地域の良さを客観的に見つめる視野や、ボランティア活動等の地域活動に主体的に参画する意欲・態度を身に付けることを目的とする。
2. 主催 日高管内社会教育職員研究協議会 日高管内社会教育主事会
3. 後援 北海道教育庁日高教育局
4. 参加対象 日高管内の中学校、高等学校に在籍する生徒 各町3～6名
日高管内各町教育委員会職員 各町1～2名
学校関係者（引率希望者） 若干名
5. 研修テーマ 「性の多様性を知り相手の気持ちを尊重する相互理解のため私たちが出来ること」
①講演「LGBTQへの理解促進と私が再び笑顔を取り戻すための道のり」
②ワークショップ
 - ・学校でLGBTQの方達が困ること考えてみよう
 - ・どんな学校だったらいいと思う
 - ・どんな街だったらいいと思う
 - ・まとめ
6. 講師 札幌レインボープライド副実行委員長兼パウダールーム店長 満島 てる子 氏
三重県桑名市出身 1990年生まれ。
オープンリーゲイの女装家として、多様性を認め合う社会を実現すべく活動中。
北海道大学大学院文学研究科修了
札幌市エイズ対策推進協議会会員
HBC「今日ドキッ！」のコメンテーターなど多方面で活躍中
7. 日程 令和6年11月30日（土） 10時00分～15時00分
受付 9:30～10:00
開会式 10:00～ ・主催者挨拶 ・講師紹介
講演 10:10～
休憩 11:20～
質問応答 11:30～
昼食・休憩 12:00～
ワークショップ 13:00～
休憩 14:30～ 閉会式 14:40～ 講評 15:00 終了予定
8. 会場 門別総合町民センター（福祉センター） 日高町富川東6丁目3番1号
9. 持ち物等 ①筆記用具 ②飲み物(自販機あり) ③昼食(弁当を斡旋します。950円(お茶付き))
※弁当(950円)を斡旋します。希望者は申込書に記載してください
代金は当日集金します。(キャンセルは11月25日17時まで 01456-2-2451へ)
10. 諸連絡 (1) 事業中に撮影した写真は報告書等に掲載させていただきます。また、報道機関等による取材がありますので、あらかじめ御了承ください。
(2) 施設内では手指消毒の御協力をお願いします。

11. 申込先 浦河町教育委員会社会教育課（担当：小田）
〒057-0013 浦河町大通3丁目52 総合文化会館内
TEL0146-22-5000 FAX0146-22-0100
Mail shakaikyoiku@town.urakawa.hokkaido.jp
各町教育委員会は参加者を取りまとめ、令和6年11月8日（金）までに、
「参加申込書」及び「参加集約表」を提出願います。
12. 問合せ先 令和6年度企画運営担当：西部ブロック
日高町教育委員会（担当：奈良）
日高町富川東6丁目3番1号
TEL01456-2-2451 FAX01456-2-2453
Mail nara.hidehiko@town.hidaka.hokkaido.jp

※本研修は、日高管内社会教育職員研究協議会社会教育指導部会研修を兼ねます

令和6年度 日高管内青少年体験活動推進事業「ひだか未来塾」報告書

1. 実 施

本事業は、平成30年度より青少年体験活動推進事業を管内社会教育職員研究協議会と共同で実施しており、職員研修も併せて行うことで職員間の協力体制を築いている。

2. 概 要

日高管内の中高生を対象とした研修事業。他町の参加者と交流しながら地域課題への興味や関心を高め、その解決に向けた協議をとおして地域活動に主体的に参画する意欲等を身につけることを目的としている。今回の事業に関しては、LGBTQの当事者の満島てる子氏を講師として招いて、事業を実施した。

3. 役割分担

日高西部・中部・東部のブロックで分担。令和6年度は、企画運営を西部、発送集約を東部、記録報告は中部が担当。

4. テーマの設定

「性の多様性を知り、相手の気持ちを尊重する相互理解のため私たちが出来ること。」をテーマとして、講演から性の多様性を学び、自身と他者の違いを理解する。

グループワークをとおして、主体的に解決する方法を学び、さらに他者理解を促進する。

その結果、今回の研修で学んだことを地元を持ち帰り、還元する主体的態度の育成。

主体性をもって、地域に画一的な価値観ではなく、共栄の精神をもって生活に活かしていこうとする姿勢を、参加者に促すために今回のテーマを設定した。

5. 講演内容

【LGBTQへの理解促進と私が再び笑顔を取り戻すための道のり】

LGBTQの基本知識として、セクシュアリティやジェンダーの多様性を表すために使われる「セクシュアリティマップ」に基づき、性の多様性について講演をいただいた。

「ゲイ」と呼ばれるセクシュアリティにも、トランスジェンダーの視点から、女性として生まれながらも性自認が男性の場合は、ゲイとして名乗る場合もある。

つまり、生まれた性別に依存しない自己認識が広がっている。

講演後半は、講師自身が多感な学生時代に感じた社会への葛藤や、周囲に理解を得られないのでないかという孤独感から、どのように立ち直ったか、また、当事者から打ち明けられた相手の気持ちに対して、「気にしないよ」などと簡単に流すのではなく、「打ち明けてくれて、ありがとう」と受け止めることが重要である。

余計な手助け（アウティング）などではなく、肯定的な態度とコミュニケーションを通じて、関係を深めてくることが大切と、話された。

～講演の様子～



6. グループワーク

講演で学んだことをとおして、テーマに沿って中高生達で協議を行った。

また、各グループに社会教育職員をファシリテーターとして配置することによって、社会教育職員のスキルアップを兼ねた。

テーマについては、以下のとおり

①学校でLGBTQの友達が困ることを考えてみよう

②未来の学校や街の話をしよう（どんな学校や街になれば良いと思う？）

③未来に向けた言葉を作ろう（街に貼るLGBTQ促進のポスターを作るとしたらどんな題名にする？）

そのなかで、「相手にどこまで相談するか、どこまで話して良いのか」「学校イベントや授業にLGBTQについて取り入れる」など意見や、「100万色の中の私たち」などの素晴らしいスローガンが提案された。

～グループワーク・発表の様子～



7. 中高生の感想（抜粋）

【講演】

○10人に1人の割合でLGBTQの方がいることにビックリしました。

○LGBTQに関して学べる場所が少ないから良い経験でした。

○もし誰かからカミングアウトを受けたら相手の気持ちを大事にしたいし、私にできることがあれば何かしたいと思った。

【グループワーク】

○他の学校の人と意見を話し合い、これからの社会について考えることができたから。

○自分の意見も他の人の意見も取り入れられたから。

○自分以外の考えを聞くことが出来て、今度からはきちんと考えよう行動してみよう、と思える

ことがあったからです。

○最初は緊張してぎこちなかったが、活動を重ねるにつれ、話しやすくなり、意見もたくさん話し合えたから。

8. 総括

講演が契機となって、参加者個人が、自身を見つめ直すきっかけとなり、画一的な視点を排除することができた。

グループワークを行うことで、参加者が共生社会や相互理解への協議をとおして、主体的に解決する方法を学ぶことができた。

こうしたテーマを学び、考える機会を持つことで、周囲の人との関係を見直すきっかけとなるのではないかと考えた。

自身の身近な人がセクシュアルマイノリティだったとき、どのように受け止め、接してくべきか想像してみることが大切だということを学んだ。

また、職員のスキルアップの現場としても、管内各町がそれぞれ役割を担うことで職員間の連携や知識の共有につながり、人事異動による個人の知識・経験不足などを補い、持続可能な体制の構築に欠かせないと感じた。



令和6年度

日高管内社会教育職員研究協議会社会体育指導部会研修会開催要項

1. 趣 旨 体育担当職員として専門性を高めるための方策を研究し、各町社会体育事業の充実を図るとともに、管内体育担当職員が一堂に会し、社会体育職員としての資質を高め、その職務や役割について理解を深めることを目的とする。
2. 主 催 日高管内教育委員会連絡協議会
3. 主 管 日高管内社会教育職員研究協議会 社会体育指導部会
4. 期 日 令和7年3月4日（火） 11時00分～16時00分
5. 会 場 浦河町総合文化会館 第3研修室・舞踏室
6. 参加対象 (1) 日高管内社会教育職員研究協議会社会体育指導部員
(2) 日高管内社会体育関係職員
7. 内 容 (1) 実 技 『コアチューニング』
講 師 コアチューニングインストラクター
西 山 智 子 氏
(2) 協 議 『部活動の地域移行について』
8. 日 程
10:30 10:50 11:00 12:00 13:00 14:45 16:00

受付	開会	実 技	昼 食	協 議	視 察
----	----	-----	-----	-----	-----
9. 参加申込 別紙申込書により、2月25日（火）までに浦河町ファミリースポーツセンターまでご報告願います。
F A X : 0146-22-1763
E-mail : f-s-c@town.urakawa.hokkaido.jp
10. そ の 他 昼食は事務局で用意します。
当日は、実技がありますので運動できる服装で来てください。

【事務局】浦河町教育委員会 社会教育課スポーツ振興室

担 当 : 鳥井

電 話 : 0146-22-3953 F A X : 0146-22-1763

令和6年度

日高管内社会教育職員研究協議会社会体育指導部会研修会実施報告

- 期 日 令和7年3月4日（水）
- 場 所 浦河町総合文化会館 第3研修室・舞踏室
- 趣 旨 体育担当職員として専門性を高めるための方策を研究し、各町社会体育事業の充実を図るとともに、管内体育担当職員が一堂に会し、社会体育職員としての資質を高め、その職務や役割について理解を深めることを目的とする。
- 内 容 (1) 実 技 『コアチューニング』
講師 コアチューニングインストラクター 西山 智子氏
(2) 協議事項 『部活動の地域移行について』
進行 浦河町教育委員会社会教育課スポーツ振興室
- 実 技 コアチューニングインストラクター西山智子氏を招き、コアチューニングを実施した。コアチューニングとは呼吸で体を弛めながら、腹圧を高め、心も体もブレない自然体な自分にする身心調律メソッド。駒大苫小牧硬式野球部なども取り入れている実績がある。
- 協議事項 地域移行について各町の進捗状況確認
- 新ひだか町 : R6年度6団体移行済み（水泳・柔道・剣道2団体・ソフトテニス・女子バレー、バスケット）R7年度はバトミントン・男子バレー追加予定
- 日 高 町 : 柔道・剣道移行済み。R7年度以降NPO法人の立ち上げについて検討を進める。R9年までに移行完了で進めて行く予定。
- 新 冠 町 : 協議会を立ち上げ、受け入れられる団体の交渉中。指導者の確保が課題。
- 浦 河 町 : 水泳・柔道移行済み。スケートは外部指導として実施している。
- 様 似 町 : 総合教育会議を開き今後どのように進めるか検討中。6競技中2競技については合同でないと出場できない状況。
- えりも町 : R6年度に協議会を立ち上げ会議を実施。吹奏楽部のみ移行済み。
- 日高教育局 : 地域移行としてきた名称は、学校で運営されてきた活動を地域全体で支える趣旨から、「地域展開」に変更する案が示されている。人材バンクの活用率は6%。地域の方々と一緒になって話し合いを進めることが重要ではないか。教師の指導技術も教わる必要があるのではないか。

全体協議

- ・各町の指導者に対する報酬はどうなっているか。
→地域移行の関係で指導者に報酬を支払うならば、少年団の指導者も一緒に考えていかななくてはならないのでは。
- ・現状少年団がメインとなって進めるのは難しいのでは。競技によってはボール・コート等規格が違う。指導者の負担が大きいのでは。スポーツ協会がメインでやるのがいいのでは。
- ・交通手段の確保も必要。ただ、アンケートを実施した際には、少年団活動している子供の親についてはある程度送迎の理解がある家庭も多かった。

(1) 実技



(2) 協議



令和6年度 日高管内図書館振興協議会研究集会 開催要項

- 1 趣 旨 日高管内の図書館関係職員が一堂に会し、専門的な知識・技術について研修を行い、図書館サービスの向上を図る。
- 2 主 催 日高管内図書館振興協議会
- 3 後 援 北海道図書館振興協議会
日高管内社会教育職員研究協議会
- 4 期 日 令和6年10月17日（木）
- 5 会 場 浦河町立図書館
- 6 内 容 「図書館とデザイン」
・ポスター作製等の基礎の話
・各館作成ポスターへのアドバイス
・記念誌の表紙デザイン案について
- 7 講 師 山口このみ
グラフィックデザイナー/イラストレーター
Komi desigN 代表 浦河生まれ、東海大学芸術工学部卒業
- 8 対 象 日高管内図書館関係職員
- 9 参加者数 10名程度
- 10 参加費 不要
- 11 参加申込 WEBフォーム (<https://forms.gle/wvPjTvsfoUBW5Kzq7>)
にて事務局へお申込みください。
申込期限 令和6年9月22日（日）
- 12 事前提出資料 過去に作成したポスター（ちらし）1枚（PDFデータ）
提出先 浦河町立図書館
Mail toshokan@town.urakawa.hokkaido.jp
- 13 お問い合わせ 日高管内図書館振興協議会 事務局
新ひだか町図書館 担当 新山
〒056-0024
日高郡新ひだか町静内山手町3丁目1-1
TEL 0146-42-4212 FAX 0146-42-5150
事務局 Mail hidakatosyo@gmail.com



令和6年度 日高管内社会教育職員研究協議会

図書館部会 事業報告書

令和6年度日高管内図書館振興協議会研究集会

研究テーマ「図書館とデザイン」

講師 山口このみ

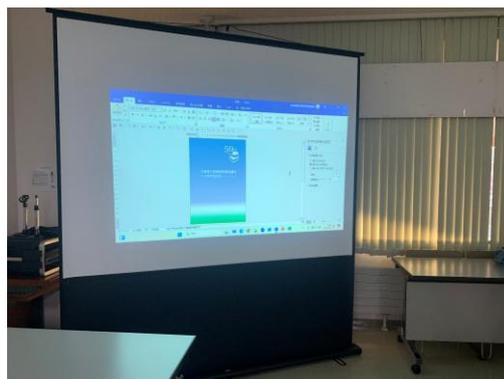
グラフィックデザイナー/イラストレーター Komi desigN 代表

- 1 日 時 令和6年10月17日（木）13時～16時
- 2 会 場 浦河町立図書館
- 3 参加人数 日高管内図書館職員（5名）
- 4 目 的 日高管内の図書館関係職員が一堂に会し、専門的な知識・技術について研修を行い、図書館サービスの向上を図る。
- 5 研修内容
 - (1) デザインの基礎
 - (2) ちらし・ポスターの改善点
 - (3) 記念誌の表紙デザイン案について

今回の研修は、図書館は事業や展示等にあわせて、ポスターやチラシを作成することが多いため、デザインの基本についての研修をおこないました。

色やイラストの選び方、フォントや文章を整理することの重要性など、ポイントを押さえながら詳しく教えていただきました。過去の事業で使用したポスター等を事前に提出し、講師に改善点や良い点について指摘も受けることができ、実践に即した形でもデザインについて学ぶことができました。

参加者からも「研修の後でポスターをつくる時なども意識することで、より良いポスターをつくることのできた」などの意見も多く、よい研修の機会となりました。



令和6年度

日胆地区博物館等連絡協議会研修会
兼 日高管内社会教育職員研究協議会学芸員部会研修会

- 1 目的 本研修会は会員の資質向上を図り、博物館活動の充実と発展に寄与することを目的とする。なお、このたびは、日高管内社会教育職員研究協議会学芸員部会研修会を兼ねる。
- 2 テーマ 博物館法改正後の博物館活動：努力義務となった地域活力向上への寄与
- 3 主催 日胆地区博物館等連絡協議会（主管 日高管内社会教育職員研究協議会学芸員部会）
- 4 期日 令和6年10月29日（火）～令和6年10月30日（水）
- 5 会場 新ひだか町博物館（新ひだか町静内山手町3-1-1）
- 6 内容
- 第1日目 10月29日（火）：研修会

受付	12:30～13:00	
開会式	13:00～13:10	日胆地区博物館等連絡協議会長あいさつ、日程説明
趣旨説明	13:10～13:30	研修の趣旨
講話1	13:30～14:00	日高山脈襟裳十勝国立公園の指定について 新ひだか町総務部企画課 係長 高野圭司 氏
講話2	14:00～14:30	日高山脈襟裳十勝国立公園のこれから 新ひだか町総務部まちづくり推進課 主事 江田零慈 氏
話題提供1	14:50～15:20	”日高町らしさ”を追い求める図書館郷土資料館を目指して 日高町立門別図書館郷土資料館 学芸員 越崎聖也 氏
話題提供2	15:20～15:50	困っていませんか？先祖のルーツ探しへの対応 北海道稲田会 会員 中村由香 氏
話題提供3	15:50～16:20	様似郷土館における連携事業の紹介 様似郷土館学芸員 榎本 尊 氏
意見交換	16:30～17:00	
情報交換会	18:30～	新ひだか町内
 - 第2日目 10月30日（水）：エクスカーション

エクスカーション	9:30～12:00	新ひだか町イオル再生事業の見学
----------	------------	-----------------
- 7 問合せ 新ひだか町博物館（担当：斉藤大朋）
電話：0146-42-0394 FAX：0146-42-5150 メール：shinhidaka-museum@car.ocn.ne.jp

学芸員部会研修会

1 概要

本年度の研修会は、令和6年10月29日（火）、30日（水）の2日間、新ひだか町で、日胆地区博物館等連絡協議会研修会を兼ねて実施した。

研修会のテーマは、令和4年度博物館法改正により、他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与が努力義務化されたことを受けて、「博物館法改正後の博物館活動：努力義務となった地域活力向上への寄与」とした。

29日は、6名の方々に研修会のテーマに係る講話、話題提供をしていただき、意見交換をした。30日は、研修会のテーマに係る新ひだか町の取り組みを知るエクスカーション「新ひだか町イオル再生事業の見学」を行った。

研修会の参加者は、16名であった。

2 研修会

(1) 講話、話題提供、意見交換

講話では、新ひだか町総務部の高野圭司、江田零慈の両氏に、地域活性化の起爆剤になるものと期待されている「日高山脈襟裳十勝国立公園」の指定等に係る関係自治体の取組みについて、それぞれ、話をしていた。

話題提供では、日高町立門別図書館郷土資料館の越崎聖也氏より「”日高町らしさ”を追い求める図書館郷土資料館を目指して」と題して、北海道稲田会の中村由香氏より「困っていませんか？先祖のルーツ探しへの対応」と題して、様似郷土館の榎本尊氏より「様似郷土館における連携事業の紹介」と題して、研修テーマに係る取り組み事例を、それぞれ紹介していただいた。

意見交換では、話題提供について質疑応答が行われたほか、話題提供いただいた各氏の取り組みに対する賛同の声や助言などもあり、活発な意見交換となった。



高野氏(右)と江田氏(左)による講話



越崎氏(左)、中村氏(中)、榎本氏(右)からの話題提供

(2) エクスカーション

新ひだか町では、アイヌ民族とその文化への理解を促す教育機会の創出に、アイヌ政策推進交付金を活用している。具体的には、NPO法人新ひだかアイヌ協会を実施主体として、町民向け

の各種体験事業「イオル再生事業」を行っている。

このたびは、新ひだか町の「イオル再生事業」のうち、町内の全小学4年生を対象とした①サケ漁の見学、②サケの解体見学、③チセ等の施設見学を視察した。

なお、①サケ漁の見学は、児童が、静内川で、NPO法人新ひだかアイヌ協会員によるアイヌ民族の伝統的な漁具「マレク（鉤）」を用いたサケの採捕を見学するものである。②サケの解体見学は、児童が、NPO法人新ひだかアイヌ協会員の説明を受け、生物としてのサケを、また、食材としてのサケをそれぞれ学ぶほか、マレク（鉤）の使用体験をするものである。③チセ等の施設見学は、児童が、アイヌ民族の伝統的な家屋「チセ」において、新ひだか町博物館職員らの説明を受け、かつてのアイヌ民族の暮らしを学ぶものである。

現在、多くの自治体が、アイヌ政策推進交付金事業に取り組んでおり、それぞれに特徴がある。

このたびのエクスカージョンは、本研修会の参加者にとって、他の取り組みを実地に知る良い機会となった。



サケ漁の見学



マレク（鉤）の使用体験



サケの解体見学



チセ（家）の見学

日高管内社会教育主事会事業実施報告

令和6年度研究テーマ（北海道社会教育主事会研究テーマ 令和5年度～令和9年度 5カ年）
「持続可能な社会の実現に向け、地域の可能性を引き出す学びをつくる社会教育のあり方」

研究テーマの設定について

北海道社会教育主事会協議会では、令和5年度～令和9年度の5カ年の研究テーマを「持続可能な社会の実現に向け、地域の可能性を引き出す学びをつくる社会教育のあり方」としています。

このテーマは、多くの市町村が抱える人口減少による地域の衰退に、持続可能な社会の実現はこれから目指す姿であり、そのような中でも学びを通じていきいきと暮らすことのできる、そんな社会を実現しようというものです。また、行政主導から住民が主体へ、行政と住民との協働を強く意識したものです。サブテーマについてはメインテーマとのつながりを持たせながら、市町村における地域性や課題を踏まえ、管内主事会において検討し設定するということになっており、課題解決にアプローチしやすい、より現実的なテーマになるという狙いがあります。

日高管内社会教育主事会では、道主事会設定の研究テーマに沿って年間の研修・実践を行いました。

本年度の研修・実践について

1 令和6年度社会教育セミナー

- ・開催日：令和6年5月30日（木）～31日（金）
- ・会場：道民活動センタービル「かでの2・7」
- ・研修の概要
 - 基調講演「カラフルな地域づくりと社会教育への期待」
講師 学校法人湘南学園学園長 住田 昌治 氏
 - ・地域の可能性を引き出す学びを持続可能なものとするためのマネジメントやマインドについて講演を行いました。
 - 研究協議「地域のつながりづくりに向けた社会教育のあり方」

2 道南ブロック社会教育主事等研修会 日高大会

- ・開催日：令和6年9月7日（木）～8日（金）
- ・会場：浦河町総合文化会館 ・参加者：35名
- ・研修の概要

I テーマ説明：北海道立生涯学習センター

II ワークショップ：「地域課題を考えるツール FOCUS」

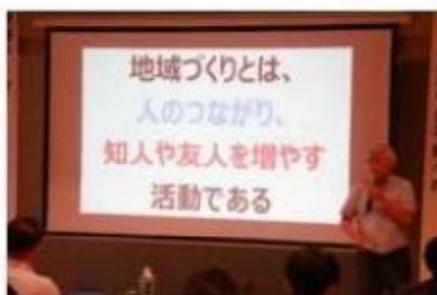
講師 北海道浦河高等学校教諭（キャリアガイダンス部長）佐藤 友洋 氏



浦河高校生徒が課題研究学習で作成した、地域課題を考えるツール「FOCUS」について、概要について説明していただき、参加者がグループに分かれ、すごろくのようなゲーム「FOCUS」を実際に体験し感想を述べました。初めて会う人同士でも楽しみながら地域課題を考えることができるよう工夫され、好評でした。

III 基調講演：演題「地元で幸せに生きるために」

講師 一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬 隆人 氏



講師の廣瀬氏（日高管内新ひだか町出身）は、自身関わっている社会教育活動の豊富な事例を紹介し、地域で幸せに生きるために大切なことについて話されました。

（講師プロフィール）北海道生まれ。北海道教育庁生涯学習部文化課社会教育主事、国立教育会館社会教育研修所専門職員、宇都宮大学教授を歴任。元栃木県教育委員長、元宇都宮市社会教育委員長。「山形学」実行委員会アドバイザー。山形県地域コミュニティ支援アドバイザー。栃木県人権施策推進審議会会長。現在、帝京大学、栃木県衛生福祉大学校など非常勤講師

3 日高管内青少年体験活動推進事業『ひだか未来塾』

（社会教育指導部会の報告を参照ください）

4 令和6年度 地域生涯学習活動実践交流セミナー

- ・開催日：令和7年2月27日（木）～28日（金）
- ・会場：道民活動センタービル「かでの2・7」
- ・研修の概要

○基調講演「未来の大人が社会を創る～SBPで日本に風をふかせよう～」

講師 一般社団法人未来の大人応援プロジェクト 岸川 晃大 氏

○事例発表

- ・14管内から1件ずつ事例発表が行われ、日高管内からは「ひだか未来塾 LGBTQへの理解促進」と題し、平取町教育委員会の窪田奨平氏が発表しました。

日高管内では各町の職員が協力・役割分担し「ひだか未来塾」を毎年開催し、各町の中高生が参加・交流しながら学ぶ機会を提供し、職員が実践し学ぶ場としても位置付けており、地域の課題解決に向け、つながりを創出する意味でも成果があったことなどを説明しました。

○研究協議

- ・小グループに分かれ、事例発表や基調講演を踏まえ協議。最後には管内ごとに集まる時間も確保され、協議の内容を振り返ったことがよかったとのことでした。

最後に

令和6年度日高管内社会教育職員研究協議会「研修関係事業報告書」における日高管内社会教育主事会事業実施報告の発行に際して、一言ご挨拶申し上げます。

日高管内社会教育主事会会員におかれましては、それぞれの町において生涯学習の推進、地域における課題解決のため、日々努力されておりますことに深く感謝と敬意を表します。

さて、本年度は北海道社会教育主事会協議会の研究テーマ「持続可能な社会の実現に向け、地域の可能性を引き出す社会教育のあり方」の2年目でした。これまでの研究テーマといいますと、個の生活の豊かさや心のゆとりをもたらす生涯学習や組織的な教育活動の支援が中心でしたが、持続可能な地域社会の実現という、とても大きなテーマに我々社会教育主事や関係職員は向き合うことになりました。

昨年4月に人口戦略会議が発表した消滅の可能性がある自治体について、ある程度の予想は出来ていたものの全国で多くの市町村がこれに当てはまり、そうでなかった自治体も含めて人口減少による地域衰退が日本全体の課題として改めて危機感を持つ契機になったのではないのでしょうか。

一方で北海道の消滅する可能性がある自治体数は117で、前回2014年調査の147自治体と比べると減少しました。他の都府県への転出が多い北海道においては、以前から人口の減少に対する影響について強い危機感をもち、移住対策や子育て支援の拡充などの様々な政策が功を奏したのかもしれない。北海道社会教育主事会協議会の研究テーマは人口減少による今後の地域の在り方を深く考えることを意識したものですから、その意味から誠に時宜を得たものと思います。

そのような中で、中高生が暮らす地域の課題から町づくりを考える主事会主催の「ひだか未来塾」は、全道の研究テーマを体現化するものであります。本年度は、自身の性について考え相手の性について理解する、性の多様化に対応したテーマを設定しました。研修を通じて我々は参加した中高生にも、自身の性に悩みながら日々生きづらさを感じている人がいること、そうでなくても関心の高い人がいることを知り、これは良い意味で我々を裏切ってくれて持続可能な社会の実現へのヒントを得るきっかけになりました。

私は常に「不易と流行」という言葉を意識しています。これを社会教育で言い換えるならば、「社会教育・生涯学習の本質はしっかりと押さえつつ、常に高いアンテナを張って社会の変化に敏感でいること」でしょうか。そのような中でこのひだか未来塾は、時代の変化に敏感で豊かな発想や無限の可能性をもつ中高生を対象に、これからどのような大人になるか（なりたいか）を考えてもらう事業で、実は社会教育指導部会の研修会も兼ねています。企画する側は研修を通じて参加者が主体的に考えて自身の言葉で伝える力を身につけてもらう「不易」と、これから新たに社会が求める必要な知識と中高生のニーズ「流行」のどちらも意識しなければなりません。当主事会もそろそろ世代交代の時期を迎えています。そんなひだか未来塾がこれからの日高の社会教育を支えていく若手職員とともに深化してもらえとうれしいですね。

最後になりますが、日頃より当主事会に対しまして、ご理解とご協力をいただいております各町教育委員会をはじめ、北海道教育庁日高教育局や関係機関の皆様にご深く感謝申し上げますとともに、管内社会教育関係者の皆様の益々のご活躍を心からお祈りし挨拶とさせていただきます。

令和7年3月

日高管内社会教育主事会
会長 増田 仁